

	電	子	展	示	会
	余	録			

## 『近代日本人の肖像』

昨年7月9日より、当館ホームページの“ギャラリー”上で『近代日本人の肖像』という電子展示会 (<http://www.ndl.go.jp/portrait/contents/index>以下、「肖像展」という。)が公開されている。内容は、政治家、官僚、軍人、実業家など戦前期の「名士」の肖像写真を展示したものである。掲載写真は主に『近世名士写真』(近世名士写真頒布会 1934-35)と『近代名士之面影 第1集』(矢部信太郎編 竹帛社 1914)掲載写真の中から選んだ。これらの人物は当時の「名士」なので、今日でも広く知られている人物もいれば、忘れ去られてしまった人物もいる。

この肖像展の人物解説の校閲を仰せつかったのは昨年2月頃である。本格的に作業に取り掛かったのは年度が開けた4月以降となったが、担当者が作成した人物解説原稿について、記述の確認、参照資料のデータに異同がある場合の判断、全体的な記述の調整を行った。作業の内容から見れば、この人物解説文の校閲は、いわば小規模な人名事典の作成である。姓名

(別称)、生没年、経歴等について資料と原稿記述を確認してゆくわけであるが、全て著名人とは限らず、初めて聞く名前もかなりあり、当館資料を渉猟したがわずかな記述しか残されていない人物もあった。各種資料間で記述に齟齬がある場合、原則として『国史大辞典』をベースに調整することとしたが、これに掲載されていない人物も多く、記述の調整に手を焼いたものである。

姓名については、資料によって読みが異なる人物が幾人かあり、この確認に難渋した。多くはベースとなる『国史大辞典』の記述や、読みの出現頻度、掲載資料の評価によって判断したが、号・別称欄に別の読みを併記したものもある。谷干城(たてき、かんじょう)、伊東祐亨(ゆうこう、すけゆき)など。また、姓名の読みを記した資料が見当たらず、常識読みを付した人物もあった(徳田金一)。

号・別称等については、肖像人物の簡便な経歴記述という趣旨から、特に有名なものに限って掲載することとした。幼



名は原則として入れていない。

生没年については、できるだけ生没年月日まで記述するという方針で調整したが、生没年の日付レベルの確認は姓名の読み以上に資料にバラツキがあった。これも判断に迷うケースは、月レベルあるいは年レベルの記述に止めるか、解説本文の冒頭に「生年が〇〇とする説もある。」との一文を入れるようにした。

解説本文について、出身地名は現在の地名（県名）とし、出自については主に明治以前に生れた人物について記した。その際、出身藩の表記は『藩史大事典』に準じた。このため萩藩（＝長州藩）、鹿児島藩（＝薩摩藩）、高知藩（＝土佐藩）、金沢藩（＝加賀藩）等となり、政治史や人口に膾炙した藩名とややズレる印象が残っている。爵位については「公爵」レベルは必ず記すことにしたが、それ以外は記載がまちまちである。なお死因については特記すべき事例以外は略すこととしている。

この種の校閲は初めての部分もあり、当初の打ち合わせ時点で執筆のガイドラインを詳細に指示できなかったため、解説全体について、ゆきつもどりつ調整せざるを得なかった。これに予想外の時間を費やしたが、語句・数値の追加・訂正も相次ぎ、公開ギリギリまで担当者にご迷惑をかける結果となってしまった。

まあとにかくこのようにして公開にたどり着いた肖像展である。特に目新しい資料を展示しているわけでもないが、掲載写真の状態は全体的に良好で、多くの

著名人の鮮明な拡大画像が画面一杯に表示されてなかなかの迫力がある。名前は知っているが顔は見たことがなかった人物と手軽に対面できる便利さもあってか、幸いにも公開以後多くのアクセスがあり、人気のサイトの一つとなっているようである。

電子展示会というものを改めて従来型の展示会と対比してみると、たしかに展示品は「本物」ではなくデジタル化されたコンテンツである。しかしながら、地理的な制約を越えてどこからでもアクセスできること、展示期間の限定がないことから、従来型の展示会とは比較にならないほど多数の利用がある。肖像展の公開後に、掲載人物の血縁者などから各種ご指摘とご質問のメールを頂いたが、ネット上に発信された情報は、想像以上に広範な人々に届いていることを改めて感じた。

また電子展示会は、掲載人物や記述項目を継続的に追加してゆくことができ、他の関連展示会等との相互リンクも可能である。掲載人物は未だ数少ないが、今後継続的にこれを拡充し、「近代デジタルライブラリー」の本文情報や憲政資料の書簡類への参照（リンク）を付与するなど、人物解説を補完する形で様々な「付加情報」を追加してゆくことができれば、かなり有用な参照サイトとなるのではなかろうか。その意味で肖像展の公開は、今後の拡大に向けた第一歩というべきかもしれない。

（主題情報部 岡田三夫）